報告

小中学生における高齢者疑似体験による学びと気づき
Learning and Awareness through the Elderly Simulation Experience in Elementary and Junior High School Students

黒河内仙奈[1)]*，間瀬　由記[1)]
１）神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部看護学科
Kana Kurokochi[1)]，Yuki Mase[1)]
１）School of Nursing, Faculty of Health and Social Services, Kanagawa University of Human Services

抄　録

《目的》小学生および中学生が高齢者疑似体験をすることによる学びと気づきを明らかにする。

《方法》2018年に小中学生30名を対象に、高齢者の身体的機能低下を体験できる疑似体験を行った。対象者は体験セットを装着し、体験課題の①階段を昇降する、②新聞を読む、③ベッドの上で寝返りをうつ、を行った。体験後に半構造化面接を実施し、逐語録から高齢者役を体験した学びと気づきを抽出して内容分析を行った。なお、本研究は研究者が所属する機関の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

《結果》小中学生の高齢者疑似体験による学びと気づきは、４カテゴリー【高齢者の特徴を知る】【高齢者のために自分ができることを考える】【自分の体験を他と比較する】【高齢者の暮らしを想像する】に分類された。コードの出現において学年ごとに発達段階による特徴を認めた。

《考察》小中学生は、体感的にそして自身との比較を通して高齢者を理解し、高齢者への援助について考えていた。また学年が上がるにつれて高齢者の身体や生活を想像する範囲に広がりを認めた。高齢者疑似体験は、低学年からの学習法として有用であり、本研究結果から学年別の到達目標のめやすを得たと考える。

キーワード：高齢者疑似体験，小中学生，高齢者への理解
Key words：Elderly simulated experience, Elementary and junior high school students, Understanding for the Elderly

Ⅰ．背景

2018年10月現在、日本の65歳以上人口は28.1％に達しており、団塊の世代が75歳以上となる2025年以降は、高齢化率の上昇とともに国民の医療や介護の需要が、さらに増加することが見込まれている。そのため、厚生労働省は、2025年を目途に、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域の包括的な支援･サービス提供体制（地域包括ケアシステム）の構築を推進している。

地域包括ケアシステムにおける「住み慣れた地域づくり」とは、そのまちで暮らす高齢者のみが考えればよいということではなく、そのまちで暮らすすべての人々が世代を超えて地域づくりについて考える必要がある。

著者連絡先：*黒河内仙奈
神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部看護学科
E-mail：kurokochi-mgv@kuhs.ac.jp
（受付　2019.9.18　／　受理　2019.12.27）

しかし、三世代世帯の割合は、昭和55（1980）年に50.1％と全世帯構造の中で一番多かったのをピークに、2017年には11.0％と減少し続けており（内閣府，2019）、小中学生が高齢者とともに生活をし、高齢者にかかわる機会が減少している。また、高齢者と同居している小中学生であっても、高齢者の生活を日常的な当たり前のことと認識して加齢による変化や影響に気づかないことがある。特に、小中学生自身が病気・障害を経験していない場合、身体機能の低下の体験を理解することは困難である。それゆえ、だれもが住み慣れた地域づくりを考える前段階として、小中学生が高齢者の特徴を知るための取り組みが必要となる。

小中学生が高齢者を理解する方法の一つに「高齢者疑似体験」がある。高齢者疑似体験とは、高齢者疑似体験セットを装着することによって、感覚機能の低下（特に視力、聴力）や手足の関節の運動が制限され、75歳から80歳ぐらいになった状態を体験できるものである（佐藤，2016）。高齢者疑似体験は、医療・福祉系の大学・学校における授業の中で実施されており、学生の対象理解を促進している（福田，秋山，石井，2003；緒方，竹山，土屋，2011；流石，亀山，2004）。現在、国内における高齢者疑似体験に関する研究は、大学生を含む成人を対象としたものが大半を占め、小中学生を対象としたものは少ない。

小中学生を対象とした研究の中で、高橋，野中，村山，安永，鈴木（2017）は、小学３年生を対象に高齢者疑似体験を実施した結果を報告している。この研究では、「疑似体験の体験者としての感想」として、７カテゴリー「不自由さへの気づき」「日常生活との比較」「活動に対する負担感」「活動に対する恐怖感」「活動を通じた高齢者理解」「活動そのものの楽しさ」「装具を装着する難しさ」を抽出しているが、１学年に実施した結果であり、小中学生全体の高齢者疑似体験の成果は明らかになっていない。また、小・中学生を対象にした高齢者疑似体験の健康教育の評価についても報告されている（中谷，光岡，長田，2002）。これは、小学５年生から中学生の小中学生14名を対象に高齢者疑似体験を実施したものであるが、小学生と中学生を合わせた分析であり、学年ごとの分析ではない。

小学校学習指導要領の中で、「体験活動の充実」が告示され、高齢者疑似体験のような体験を通じた学びが推奨されている（文部科学省，2008）が、学びの目標は設定されていない。小学生を取り上げてみても、小学１年生から６年生では明らかに発達段階が異なるため、高齢者疑似体験で何をどこまで学ぶのかを考えた場合に、それぞれの発達段階に合わせた目標の設定が必要である。しかし、高齢者疑似体験による学びに学年による差異があるのか、そしてどのような特徴をもつのかについて言及した研究は見あたらない。

Ⅱ．研究目的と意義

本研究では、小学生および中学生の高齢者疑似体験による学びと気づきを明らかにし、さらに各学年の学びと気づきの差異を検討する。これにより、高齢者疑似体験を実施する際の到達目標を設定する際のめやすを示すことができる。

到達目標を設定することで、小中学生の体験学習を促進するとともに、高齢者疑似体験を学校での授業や地域のイベントに組み入れやすくなり、高齢者を知る機会の普及につながる。その結果、世代を超えて高齢者に関心を示し、理解することで、高齢者が住み慣れた地域で暮らすことができる地域包括ケアシステムの構築に寄与することが期待できる。

Ⅲ．研究方法

１．研究対象者の選定

調査対象は、高齢者疑似体験に関心があり、インタビューに回答することのできる、本人および保護者の両方の研究への同意のある小学生（小学１年生から６年生）および中学生とした。高齢者疑似体験セットは重りを装着するため、装着による苦痛・痛みがある場合は対象から除外した。

２．高齢者疑似体験の内容

高齢者体験セットとは、膝･肘サポーター、手首･足首の重り、荷重ベスト、ヘッドホン、手袋、ゴーグル、杖を装着することで、高齢者の身体的機能低下を体験することができるものである（表１）。こ

れらのセットのうち、本研究では手袋以外の装備を採用した。装着する重りは、片足首（500g)、片手首（500g)、疑似体験用ベストおもり（１個１kg）の合計２kgを用いた。手袋を用いなかった理由は、市販の手袋のサイズは限られており小中学生の手の大きさに合ったものが入手できなかったからである。手袋をしないことで手の巧緻性の低下の疑似体験はできないことから巧緻性に関する体験課題は設定しなかった。

研究者の介助により、研究対象者が高齢者疑似体験セットを装着したのち、体験課題（①階段を昇降する、②新聞を読む、③ベッドの上で寝返りをうつ）を行った。体験セットを着用中は、研究者1名が必ず付き添い、転倒しないよう環境を整え、安全に十分配慮した。

３．調査方法

１）研究の説明と同意

2018年11月に、研究者が所属する施設のイベント会場の高齢者疑似体験の実施ブースに来場した研究対象者（小学生および中学生）と保護者に書面を用いて口頭で研究内容を説明し、同意を紙面で得た。

２）半構造化面接

高齢者疑似体験後に、研究者が作成したインタビューガイドを用いて、半構造化面接を実施した。インタビュー内容は、同意を得てICレコーダーで録音した。

３）インタビュー内容

インタビューガイドは以下の内容で構成した。

Q1：お年寄りの気持ちを理解することができましたか？それは何故ですか？

Q2：お年寄りの体験をして、どのような気持ちがしましたか？

Q3：これから、お年寄りとまちで会った時に、あなたに何かできることがあると思いますか？（ある場合は、Q4：それはどのようなことですか？）

４．分析方法

１）高齢者疑似体験による小中学生の学びと気づきの分析

本研究は、小学生および中学生が高齢者疑似体験を行うことによりどのような学びや気づきがあるのかを語りから明らかにするものであるため、Krippendorff（1989）の内容分析の技法を採用した。インタビューにより得られたデータから逐語録を作成し、小中学生の高齢者役を体験した学びや気づきに着目し、繰り返し熟読した。データは、前後の文脈の意味を失わない程度の長さで区切り、これをコードとした。次に、これらのコードから、体験による学びと気づきを分類した。それぞれ類似するコードを統合させ、抽象度を高めていき、サブカテゴリーを作成し、カテゴリーを抽出した。

２）４つの学年における学びと気づきの分析

小学生は、学年が上がるにつれて自分のことを距離をもってとらえることができるようになるという発達上の特徴がある（中央教育審議会，2008)。低学年は自分と他者が一体化しがちであるが、中学年は一定の距離をもって理解が可能になり、高学年は「自分をみるもう一人の自分」が誕生し、さらに中学生では社会を意識するようになる（国立青少年教育振興機構, 2008)。そこで発達段階による学びや気づきの特徴を把握するために、１・２年生を低学年、

表１　高齢者疑似体験セットで体験した事柄

装着するもの	体験する事柄（内容・状況など）
膝・肘サポーター	関節の動きにくさを体験
腕・足の重り	筋肉の衰えを体験
荷重ベスト	高齢者の前傾姿勢と体幹の筋力低下を体験
ヘッドホン	高音域を聞き取りにくいという高齢者の特徴を反映
ゴーグル	黄色く見えるものを使用し、白内障の症状を体験
杖	杖を使用した歩行を体験

３・４年生を中学年、５・６年生を高学年とし、中学生を含めた４つの学年におけるコードの出現を確認した。

分析は質的研究の経験を有する研究者２名で行った。それぞれの分析結果を照合し、検討を重ねることで分析の妥当性を確保した。

５．倫理的配慮

研究対象者とその保護者へ、参加の自由意思、個人情報およびプライバシー保護、途中辞退の権利、研究目的以外に用いないことについて文書を用いて口頭で説明した。研究対象者が未成年であることから、保護者の同席のもと、高齢者疑似体験のみでも可能であることを説明したうえで研究参加依頼を行った。保護者から勧めることはせず、小中学生が研究参加の意思を示した場合に同意書に本人と保護者の署名を得た。なお、本研究は研究者が所属する機関の倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号：保大第71-43）。

Ⅳ．結果

１．研究対象者の属性

本人および保護者により研究参加に同意の得られた30名を研究対象者とした。小学１年生と４年生が各６名（24.0%）と最も多かった。全体の中で４名（13.3%）は65歳以上の高齢者との同居経験を有していた（表２）。

２．高齢者疑似体験による学びと気づき

小中学生が高齢者疑似体験をすることによる学びと気づきは、56コード、18サブカテゴリー、４カテゴリー【高齢者の特徴を知る】【高齢者のために自分ができることを考える】【自分の体験を他と比較する】【高齢者の暮らしを想像する】に分類された（表３）。コードを「　」、サブカテゴリーを＜　＞、カテゴリーを【　】内に記す。

１）高齢者の特徴を知る

このカテゴリーは、小中学生が体験セットを身体に装着した状態で体験課題をこなすなかで、高齢者の身体的特徴と身体機能の低下に伴う苦悩､気持ち、生活の不自由さを体感的に理解していることを示している。これは、＜高齢者の身体的特徴を実感する＞＜想像以上の負荷を実感する＞＜身体的特徴に伴う苦悩を実感する＞＜生活の不便さを実感する＞＜高齢者の気持ちを理解する＞＜高齢者の平常を知る＞の６サブカテゴリーから構成された。

表２　研究対象者の概要（n=30）

			人数	(%)
性別		男子	11	(36.7)
		女子	19	(63.3)
学年	低学年	小1	6	(20.0)
		小2	5	(16.7)
	中学年	小3	3	(10.0)
		小4	6	(20.0)
	高学年	小5	3	(10.0)
		小6	2	(6.7)
	中学生	中1	2	(6.7)
		中2	2	(6.7)
		中3	1	(3.3)
高齢者(65歳以上)との同居経験		あり	4	(13.3)
		なし	26	(86.7)
お年寄りの気持ちを理解することができたか		はい	25	(83.3)
		いいえ	4	(13.3)
		不明	1	(3.3)
高齢者に対して自分にできることがあると思うか？		はい	24	(80.0)
		いいえ	6	(20.0)

表３　高齢者疑似体験による学びと気づき

ｶﾃｺﾞﾘｰ	サブカテゴリー	コード　（　）内は個数	低学年	中学年	高学年	中学生
高齢者の特徴を知る	身体的特徴に伴う苦悩を実感する	起き上がりがつらかった（1）	＊	＊	＊	＊
		顔を上げることが難しかった（2）				
		身体が重く、動かしにくかった（2）				
		身体が重く、歩くことが大変だった（4）				
		体がまっすぐ立てられなくて苦しかった（2）				
		首を痛めそうだった（1）				
		背中が曲がっていると苦しかった（3）				
		膝や膝の裏が痛かった（1）				
		前かがみの姿勢は背中・腰が痛くなった（2）				
	高齢者の気持ちを理解する	普段より体が重かったり、腰が曲がってそのまま歩いたりしたところからお年寄りの気持ちを理解できた（5）	＊	＊	＊	＊
		体が重くてつらい思いをしていると思った（2）				
		高齢者の動きづらさが大変だとわかった（2）				
	高齢者の身体的特徴を実感する	暗くて見えづらかった（1）	＊	＊	＊	（－）
		声が聞こえなかった（1）				
		（体験をして）歩きにくかった（1）				
		思い通りに体が動かなかった（4）				
		体が重かった（8）				
		関節が曲がりにくくなった（1）				
		お年寄りになると動きづらい（3）				
	想像以上の負荷を実感する	こんなに体が重たいと思わなかった（1）	＊	（－）	（－）	＊
		思った以上に大変だった（3）				
	高齢者の平常を知る	高齢者が毎日このような（体が重たい）生活を送っているのだと思った（1）	＊	＊	（－）	（－）
		いつもこんなにつらいのかと思った（1）				
		体の動かしづらさが毎日続くととても疲れる（1）				
	生活の不便さを実感する	靴が履きづらい（1）	＊	＊	（－）	＊
		階段を上がることが大変だった（2）				
		細かな字を読むことが不便だとわかった（1）				
		杖の先が角にぶつかったら動きにくいと思った（1）				
		ベッドで寝がえりをうつ時が大変だった（1）				
		階段を下りるときと上るときとか、ベッドに寝転がるときとかが大変だった（1）				
高齢者のために自分ができることを考える	高齢者にかかる重量の負荷を軽減する	重いものを持ってあげる(4)	＊	＊	＊	＊
		荷物をもってあげる（6）				
	関節可動域の制限に対する援助をする	起き上がりの時に手を貸す(1)	＊	＊	＊	（－）
		（円背に対して）靴を履くことを助ける（1）				
		荷物を取る時に手伝う（1）				
	歩行・移動を支援する	車いすを押す（1）	＊	＊	（－）	＊
		座席を譲る（5）				
		横断歩道で歩きづらそうな場合に誘導する（1）				
		階段を一緒に上がる（2）				
	高齢者の危険回避を図る	危ない場合は声をかけて、何か手伝う（1）	＊	＊	（－）	＊
		前が見づらいので、危ない時（前に障害物がある時に）言える（1）				
		困っていたら助ける（1）				
	視覚機能低下への支援をする	道案内をする（1）	＊	（－）	＊	（－）
		文字を読んであげる（1）				
	聴覚機能低下への支援をする	大きな声で挨拶をする（3）	＊	（－）	＊	（－）
		大きな声で話す（1）				
	高齢者の体調を気に掛ける	「大丈夫ですか」と声を掛ける（1）	（－）	＊	（－）	（－）
		毎日この状態が続くと骨が折れてしまうのではないかと心配になる（1）				
	何かできるかもしれないと思う	具体的ではないが、何かできるかもしれないと思う（2）	（－）	＊	＊	（－）
自分の体験を他と比較する	普段の自分の体と高齢者の体を比較する	普段の自分の体と全然違った（1）	（－）	＊	＊	（－）
		普段自分たちは動きやすく、お年寄りは動きにくい体勢のまま動いたりしているため大変と感じた（1）				
		普通は関節が曲がったり、体は軽いが、お年寄りだと曲がらないし、体が重くなった（1）				
	高齢者への印象と体験した実感が一致する	高齢者は大変そうに見えていたが、思っていた通り、とても大変だった（2）	（－）	（－）	＊	＊
高齢者の暮らしを想像する	高齢者の日々の生活を想像する	この体の重さのまま前を向いて、杖を持って歩くのは大変だと思った（1）	（－）	＊	（－）	＊
		いつも関節が曲がりづらくて、目も見づらいまま365日生活してたら大変だろうなと思った（3）				
	身近な人の将来を想像し、予測する	自分の祖父母が今は元気であるが、将来、手伝ったりしないといけないと思った（1）	（－）	（－）	（－）	＊

＊コードの出現をみとめたもの

よくつらいとか、そういうのを聞くけど、どんなふうに、どのぐらいなのかっていうのを知らなかったから、それがどのぐらいつらいのか知れた（小学６年生）。

おばあちゃんとかおじいちゃんとか、普段こんな感じでいるんだなって思いました（小学１年生）。

小中学生は、「暗くて見えづらかった」「声が聞こえなかった」「（体験をして）歩きにくかった」など、体験セットを装着することによる自身の感覚から＜高齢者の身体的特徴を実感＞し、また「こんなに体が重たいと思わなかった」「思った以上に大変だった」という＜想像以上の負荷を実感＞していた。さらに体験課題を通して「起き上がりがつらかった」「顔を上げることが難しかった」「体がまっすぐ立てられなくて苦しかった」など＜身体的特徴に伴う苦悩を実感＞するとともに、「靴が履きづらい」「階段を上がることが大変だった」「細かな字を読むことが不便だとわかった」など＜生活の不便さを実感＞していた。

また、小中学生の気づきは、高齢者の身体的な特徴の理解にとどまらず、「体が重くてつらい思いをしていると思った」などの＜高齢者の気持ちを理解＞や、「いつもこんなにつらいのかと思った」「体の動かしづらさが毎日続くととても疲れる」など＜高齢者の平常を知る＞ことに及んでいた。

２）高齢者のために自分ができることを考える

このカテゴリーは、体験セットを装着して体感的にとらえた高齢者の特徴に基づいて、そのような特徴を持つ高齢者に対して自分にできる、あるいはすべき援助を考える、という学びを示している。これは、＜高齢者にかかる重量の負荷を軽減する＞＜関節可動域の制限に対する援助をする＞＜歩行・移動を支援する＞＜視覚機能低下への支援をする＞＜聴覚機能低下への支援をする＞＜高齢者の体調を気に掛ける＞＜高齢者の危険回避を図る＞＜何かできるかもしれないと思う＞の８サブカテゴリーから構成された。

（腰が曲がっているため）、下しか見えないから、前、見づらいし。危ない時とか、前に木とかあったりする時には言って教えてあげられるかなって（小学２年生）。

ベッドに寝転がって起きたときに、関節が曲がりづらくて、起き上がるのも誰かに手を貸してもらわないと動けないから、そういうときに一緒に、ちょっとしたことでもできるかな（小学４年生）。

小中学生は、体験セットを装着して体感した不自由を高齢者が感じていることを前提にして具体的な援助を考えていた。運動機能の低下に関連した援助には、「重いものを持ってあげる」「荷物をもってあげる」という＜高齢者にかかる重量の負荷を軽減する＞こと、「起き上がりの時に手を貸す」「（円背に対して）靴を履くことを助ける」などの＜関節可動域の制限に対する援助をする＞こと、「座席を譲る」「横断歩道で歩きづらそうな場合に誘導する」などの＜歩行・移動を支援する＞ことがあった。また、感覚器の機能低下は、「道案内をする」「文字を読んであげる」という＜視覚機能低下への支援をする＞こと、「大きな声で挨拶をする」「大きな声で話す」という＜聴覚機能低下への支援をする＞ことがあった。

さらに、高齢者の低下した身体機能への直接的な援助だけでなく、「毎日この状態が続くと骨が折れてしまうのではないかと心配になる」などの＜高齢者の体調を気に掛ける＞ことや、高齢者の身に迫る危険を予測して「危ない場合は声をかけて、何か手伝う」などの＜高齢者の危険回避を図る＞ことができると考えていた。そして「具体的ではないが、何かできるかもしれないと思う」という＜何かできるかもしれない＞という思いがあった。

３）自分の体験を他と比較する

このカテゴリーは、小中学生が自分の身体機能や今回の高齢者疑似体験をこれまで漠然ともっていた高齢者の身体機能やイメージと比べることによる気づきを示している。これは、＜普段の自分の体と高齢者の体を比較する＞＜高齢者への印象と体験した実感が一致する＞の２サブカテゴリーから構成された。

普段自分たちがとても動きやすいっていうことが、よく分かって、お年寄りは動きにくい体勢のまま動いたりしているから、大変だなって感じました（小学６年生）。

（お年寄りが）生活をするのにすごく大変そうにしてるから、どうなんだろうって思っていたけれど、実際にやってみて、ほんとにすごく大変だった（小学５年生）。

小中学生は、「普段の自分の体と全然違った」「普通は関節が曲がるし、体は軽いが、お年寄りだと曲がらないし、体が重くなった」などの＜普段の自分の体と高齢者の体を比較する＞という運動機能に着目した比較を行っていた。また「高齢者は大変そうに見えていたが、思っていた通り、とても大変だった」という＜高齢者への印象と体験した実感が一致する＞学びを得ていた。

４）高齢者の暮らしを想像する

このカテゴリーは、体験セットを装着したこと、そして体験課題を通して体感的に理解した高齢者の身体的特徴や不自由さを、毎日という連続した時間軸で想像したり、自分を含む身近な人の将来的な老いとして予測したりすることを示している。これは、＜高齢者の日々の生活を想像する＞＜身近な人の将来を想像し、予測する＞の２サブカテゴリーから構成された。

（疑似体験という）これだけの時間でもすごく大変だったから、これが毎日続くかと思うとすごく大変で、あんまり外に出たくないなって思った（中学２年生）。

（体験をしてみると）なだらかな階段を上るのも大変だったから、今は自分のおじいちゃんとかおばあちゃんは結構元気なんだけど、そのうちそうなったときに、手伝ったりとかしないといけないなって思いました（中学１年生）。

小中学生は、高齢者疑似体験という一時的な、そして限られた行為の体験から、「この体の重さのまま前を向いて、杖を持って歩くのは大変だと思った」「いつも関節が曲がりづらくて、目も見づらいまま365日生活していたら大変だろうなと思った」のように＜高齢者の日々の生活を想像する＞ことをしていた。

中学生では、「自分の祖父母が今は元気であるが、将来、手伝ったりしないといけないと思った」のように＜身近な人の将来を想像し、予測する＞ことができていた。

３．学年の段階別にみた高齢者疑似体験による学び

表３に示すように４カテゴリーすべてに低学年から中学生によるコードが含まれた。

中学年にのみ認めたサブカテゴリーは、【高齢者のために自分ができることを考える】の＜高齢者の体調を気に掛ける＞であった。中・高学年にのみ認めたサブカテゴリーは、【高齢者のために自分ができることを考える】の＜何かできるかもしれないと思う＞、【自分の体験を他と比較する】の＜普段の自分の体と高齢者の体を比較する＞であった。中学年と中学生のみに認めたのは、【高齢者の暮らしを想像する】の＜高齢者の日々の生活を想像する＞であった。

高学年以上にのみ認めたサブカテゴリーは、【自分の体験を他と比較する】の＜高齢者への印象と体験した実感が一致する＞であった。

中学生にのみ認めたサブカテゴリーは、【高齢者の暮らしを想像する】の＜身近な人の将来を想像し、予測する＞であった。

Ⅴ．考察

１．小中学生の発達段階に応じた高齢者疑似体験における学び

小中学生は、高齢者の身体的な特徴を知るにとどまらず、自分の体と比較をしたり、その特徴を踏まえて高齢者がどのような生活を送っているのか、自分にできることは何かを考えたりすることができ、高齢者を理解することにつながっていた。これは、小学３年生を対象とした高齢者疑似体験の実施に関する先行研究（高橋ら，2017）の知見を支持するものであった。

本研究では、４カテゴリーすべてに低学年から中学生によるコードが含まれたが、サブカテゴリーに注目すると、発達段階に応じて、含まれるコードが異なった。

中学年以上にのみ認めたサブカテゴリーは、【高齢者のために自分ができることを考える】の＜高齢者の体調を気に掛ける＞＜何かできるかもしれないと思う＞の２つであり、他者への配慮や高齢者支援への関心の高まりを示唆している。これは、中学年は、考えが多面的で未来予測可能となるため、自分の将来についても自分の能力と現実的な状況とを照らし合わせながら思考するようになる（勝田，2019）という特徴を反映しているといえる。

高学年以上にのみ認めたサブカテゴリーは、【自分の体験を他と比較する】の＜高齢者への印象と体験した実感が一致する＞であった。高学年は、知的な能力において，抽象的、論理的に思考する力が増す時期である（内田，中村，2005）。すなわち、高齢者への印象という抽象的なイメージと、体験することによる具体的な実感とを結びつけて考えることができているといえる。したがって、高学年以上の場合は、体験した範囲を超えて高齢者の生活を想像する学習につなげることができると考える。

中学生にのみ認めたサブカテゴリーは、【高齢者の暮らしを想像する】の＜身近な人の将来を想像し、予測する＞のみであった。中学生は、目に見えない抽象的な事柄についてかなり深い思索ができ、社会の一員としての自覚がめばえてくる時期である（舟島，望月，2017）。つまり、身近な大人が将来、必ず年をとり高齢者になることを想像できることを示している。したがって、高齢者にとってどのような社会が求められているかなど、社会福祉に関連した学習に発展させることができると考える。

本研究では、小中学生の高齢者疑似体験では、学年が上がるにつれて、その成長段階に応じた学びや気づきがあった。これは、Havighurst（1997）が「個々人の一定の時期に達成するべき発達課題がある」と述べているように、高齢者疑似体験を実施する対象者すべてに同じ目標を設定するのではなく、発達段階に応じた目標を慎重に設定することの必要性を示唆している。ゆえに、本研究の結果は、各年代に合わせた高齢者疑似体験を実施する際の到達目標の設定のめやすになると考える。

２．高齢者疑似体験を実施する学習環境

一般的に、高齢者疑似体験は、体験者、援助者、観察者という３人一組で行う場合が多く、これまでの研究では、その方法で実施した報告が大半を占める（栗原，木之瀬，井上，大津，新田，2004;小野，岩山，田中，芦田，小正，2017;高岡，留畑，服部，2005）。しかし、３人一組で実施する場合には、３人がそれぞれ順番に立場を交代して実施をするため、体験課題の遂行や物品の着脱を含めると、かなりの時間を要する。

今回の研究では、研究者が所属する施設のイベント会場の高齢者疑似体験の実施ブースに来場した小中学生に、体験者役のみに限定して実施したところ、体験者役のみでも、高齢者本人の身体的特徴を実感するだけでなく、＜高齢者のために自分にできることを考える＞という、援助者役としての立場からも高齢者を理解することができていた。これにより、体験者の安全を確保する付き添い役がいれば、「体験者役のみを体験する」という簡易的な方法を用いることが可能と考える。これは、高齢者疑似体験が実施しやすければ、イベント等において、より多くの人が高齢者を知る機会となり得ることが示唆された。

Ⅵ．研究の限界と今後の課題

１．研究の限界

本研究では、研究対象者に手袋の着用を求めなかった。そのため、高齢者の身体的特徴である「指先の巧緻性の低下」を研究対象者が経験していない。その結果、研究の結果である＜高齢者の特徴を知る＞の中に、手先を使う事柄（例えば、物を掴みにくい）についての記述が含まれていない。

また、全体の研究対象者は30名であるものの、各学年では６名以下であり、分析結果が飽和に達しているとは言い難い。そのため、低学年・中学年に認められたが高学年・中学生に認められていない＜想像以上の負荷を実感する＞など、低い学年には認めたが高い学年には認めなかったサブカテゴリーについて、対象者を増やすことで結果が変わる可能性が

ある。

さらに、本研究では研究対象者は体験者役のみの実施であり、援助者、観察者を実施しておらず、体験後の複数名での討議は未実施である。そのため、他者との学びについての議論を行うことで、新たな気づきが得られる可能性があることが本研究の限界である。

２．小中学生を対象とした高齢者疑似体験の実施における課題

１）高齢者の多様性を理解するプログラムの実施

エイジズム（年齢差別）とは、高齢であることを理由とする、人々に対する系統的なスレテオタイプ化と差別のプロセスである（Butler, 1969）。高齢者疑似体験では、高齢者の身体的機能低下を体験するがゆえに、「高齢者＝弱い，つらい」という高齢者への否定的な印象のみを感じることにつながり、エイジズムを助長する可能性を含んでいる。これは、先行研究でも指摘されており（高橋ら，2017）、生活者として多様な高齢者のありのままの姿を理解するプログラムと並行して実施することが必要である。

２）高齢者と直接触れ合うことから学ぶ環境の整備

文部科学省（2008）は学習指導要領の中で、体験活動の重要性を示し、今後の教育において重視されなければならないのは、ヒト・モノや実社会に実際に触れ、かかわり合う「直接体験」であると指摘している。つまり、高齢者疑似体験において、小中学生同士で高齢者への理解を高め合うだけではなく、高齢者自身と触れ合う中で学びを深めることが求められおり、学習環境を整える必要がある。これは、前述の「生活者として多様な高齢者のありのままの姿を理解する」ことにつながる。そのためには、小中学生の高齢者疑似体験に参加する高齢者ボランティアの募集や育成を必要とする。高齢者がボランティアを担うことは、高齢者にとっても社会参加の機会となり、フレイル予防など高齢者の健康増進にもつながる（吉澤，田中，高橋，藤崎，飯島，2019）。以上のことから、小中学生のためだけではなく、高齢者にとっても有益な学習環境の整備が今後の課題である。

Ⅶ．結論

小中学生および中学生が高齢者疑似体験をすることによる学びと気づきは、【高齢者の特徴を知る】【高齢者のために自分ができることを考える】【自分の体験を他と比較する】【高齢者の暮らしを想像する】に分類された。

４カテゴリーすべてに低学年から中学生によるコードが含まれたが、学年が上がるにつれて、その成長段階に応じた学びや気づきがあった。

Ⅷ．謝辞

本研究にご協力をいただきました研究対象者の小中学生の皆様、ならびに保護者の皆様へ深謝致します。

Ⅸ．研究の資金源および利益相反

本研究は本学の平成30年度地域貢献研究センター研究事業助成金により実施した。なお、本研究による利益相反はない。

引用文献

Butler, R. N. (1969). Age-ism: another form of bigotry. The Gerontologist, 9(4), 243-246.

中央教育審議会．（2008）．幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）．http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf（最終検索日：2019年11月３日）

福田博美，秋山志津子，石井美紀代．（2003）．高齢者体験セットを身に付ける前後の「高齢者に関する記述」の変化．*愛知教育大学研究報告 教育科学, 52,* 75-79.

舟島なをみ，望月美知代．（2017）．*看護のための人間発達学 第５版,*（p.99），東京：医学書院．

Havighurst, R. J. (1997). *ハヴィガーストの発達課題と教育.* 児玉憲典，飯塚裕子翻訳．東京：川島書

店．（原著1992）

勝田仁美．（2019）．２章４節 学童期の小中学生の成長・発達と看護．中野綾美（編），*小児の発達と看護*（pp.134-150）．大阪：メディカ出版．

国立青少年教育振興機構．（2008）．体験を通して学ぶ教科学習のすすめ．http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/50/（最終検索日：2019年11月３日）

厚生労働省ホームページ．https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/ （最終確認日：2019年９月17日）

内閣府．（2019）．高齢社会白書．https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/html/zenbun/index.html（最終確認日：2019年９月７日）

Krippendorff, K. (1989). *メッセージ分析の技法．* 三上俊治，椎野信雄，橋元良明翻訳．東京：勁草書房．（原著1980）

栗原トヨ子，木之瀬隆，井上薫，大津慶子，新田收他．（2004）．保健医療系学生のための高齢者疑似体験プログラムの意義：体験による高齢者に対する意識の変化の考察．*日本保健科学学会誌，7(3),* 194-199.

文部科学省ホームページ．（2008）．体験活動の教育的意義．http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055/003.htm（最終確認日：2019年９月17日）

中谷久恵，光岡攝子，長田京子．（2002）．小・中学生を対象にした高齢者疑似体験による健康教育の評価．*島根医科大学紀要，(25)*，11-15.

緒方昭子，竹山ゆみ子，土屋八千代．（2011）．高齢者体験セットを用いての片麻痺高齢者の車いす移乗・移送の演習評価　看護師役・高齢者役・観察者の３側面の学生の記録より．*南九州看護研究誌，9(1),* 39-46.

小野圭昭，岩山和史，田中栄士，芦田貴司，小正裕．（2017）．高齢者疑似体験実習の学修効果に及ぼす因子：―性別と実習実施者の影響―．*老年歯科医学，32(3),* 357-364.

流石ゆり子，亀山直子．（2004）．『健康高齢者実習』の意義：学生の実習終了後レポートの分析による学習内容の検討（実践報告）．*老年看護学，9(1),* 65-75.

佐藤圭子．（2016）．７章２節 高齢者疑似体験．堀内ふき，大渕律子，諏訪さゆり（編），*高齢者の健康と障害*（pp.298-304）．大阪：メディカ出版．

高橋知也，野中久美子，村山幸子，安永正史，鈴木宏．（2017）．小学校での高齢者疑似体験における学びの様相：活動に関する振り返りの内容分析と、疑似体験中の会話分析から．*日本世代間交流学会誌，6(1),* 15-25.

高岡哲子，留畑寿美江，服部ユカリ．（2005）．看護学生の「高齢者疑似体験」後の高齢者観と教育プログラムの検討．*旭川医科大学研究フォーラム，6(1),* 33-42.

内田雅代，中村伸枝．（2005）．第Ⅲ章５節 学童の生活とケア．及川郁子（編），*健康な小中学生の看護*（pp.209-224）．東京：メヂカルフレンド社．

吉澤裕世，田中友規，高橋競，藤崎万裕，飯島勝矢．（2019）．地域在住高齢者における身体・文化・地域活動の重複実施とフレイルとの関係．*日本公衆衛生雑誌，66(6),* 306-316.